飛行機の操縦席に座る大友勇樹さん

北斗病院 大友勇樹さん

空飛ぶ医師 夢かなえた

多忙な心臓血管外科、3年かけ操縦士資格

帯広市内の北斗病院（新田一美院長）の心臓血管外科専門医・大友勇樹さん（36）は今年3月、飛行機の操縦に必要な「自家用操縦士」の国家資格を取得した。代々医師の家系という境遇ながら、飛行機を操縦するのが幼い頃からの夢だった。「難関でプレッシャーもあったが、合格できてうれしい」。幼少からの夢を実現し、晴れやかな笑顔を見せる。（菊地青葉）

心臓血管外科医として白衣姿で勤務中の大友さん

幼い頃から夢中 航大帯広目指し

1988年神奈川県横浜市生まれ。北里大医学部卒。祖父と父が横浜の開業医で、自身も医師の道に進んだ。一方で、祖母の親戚に航空関係者が多く、幼少期から飛行機のおもちゃを与えられ、親戚がいる九州にたびたび飛行機で行き来した。いつの間にか飛行機に夢中になり、パイロットを志すようになった。

高校2年まで志を持ち続け、航空大学校帯広分校を志望した。しかし、実家が病院で、家族の期待も背負っていた。パイロットの夢を断念して医師の道に進み、東京や神奈川での勤務を経て、2018年から北斗病院で働いている。

練習を共にしたというセスナ172型の前で

憧れに火付けたシミュレーター

同教室の講師・淡路滋弥さんがNPO法人FASフライト連盟（帯広）の理事長を務めていたこともあり、早速加盟して学びを深めた。19年秋に東京転勤となった。飛行機好きの同僚医師に誘われ、当時十勝毎日新聞社が主催していたカルチャー教室・かちまいアカデミーの「航空学及びフライト・シミュレーター教室」を受講。気象や工学、航法など航空基礎知識を身に付けるうちに、再び空への憧れが湧き上がった。

転勤先の帯広で転機が訪れた。

電子版に関連記事

パイロットの身体検査医に

この間、パイロットとは不思議な縁があった。配属先の北斗病院が道内3カ所、道東唯一の航空身体検査機関で、パイロットの身体検査を行う指定航空身体検査医になることができた。早速、講習を受けて指定医となり、23年ごろから毎週金曜日に外来でパイロットの身体検査にあたっている。

また、同じ頃に航空大学校帯広分校の校医のオファーも受けた。同校が志望校だっただけに、「諦めたところからオファーが来たのは面白いと思った」。

晴れて操縦資格を手にし、校医や検査医の立場で今まで以上に、パイロットたちに寄り添うことができると考えている。「相談しやすい」とパイロットや学生からの信頼も厚い。

昨年12月28日には、娘の恵舞（えま）ちゃんが生まれ、仕事もプライベートも充実した日々。「時間があったらゆっくり十勝・帯広の大空を飛んでみたい。今後もできる限り練習を重ね、さらに上の資格も取りたい」。大空への夢をさらに膨らませている。

なったものの、21年4月に再び北斗病院に戻り、そこからFASフライト連盟のセスナ172型で本格的に資格取得に向けた飛行訓練に打ち込んだ。

休みの日などを使って3年ほどかけて訓練を重ねた。今年3月に行われた国家試験「航空従事者実地試験」で口頭試問や実技試験に臨み、一発で合格を勝ち取った。「少ないプライベート時間をやりくりした。家から空港まで車で25分という環境があったおかげで何とかやれた」。指導した淡路理事長も「優秀で短い期間で取得された」と太鼓判を押す。

パイロット資格　航空業務を行うには国土交通省の技能証明（ライセンス）が必要となる。このうち航空機パイロット（操縦士）には3種類の資格がある。「自家用操縦士」は、スポーツとしてのグライダーや自家用飛行機など報酬を受けずに無償の運航をする航空機の操縦を行える。上位の資格として順に「事業用操縦士」「定期運送用操縦士」がある。

取得のためには一定の年齢と飛行経歴を満たした上で、対応する国家試験に合格する必要がある。試験は学科と実地があり、学科試験は年6回行われている。「自家用操縦士」に求められる飛行経歴は、飛行機・回転翼機の場合で総飛行時間40時間以上で10時間以上の単独飛行など。実際の航空業務には、操縦士のライセンスのほか、指定航空身体検査医による航空身体検査の合格や無線従事者資格も必要となる。身体検査は、定期運送用操縦士の場合は半年に1回受けなければならない。